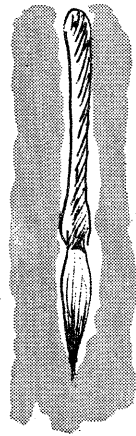


幼稚園真諦 復刊の序

倉橋惣三選集第一卷より



わたしは、この書の初版の序に、こう書いている。

『真諦とは、われなら、おこがまし過ぎる僭称である。識者の笑いを買うをおそれる。実は、保育法に関する一つの考え方というべきであらう。ただその考え方が、自分としては、これ以上動かないのである。身を幼稚園に置くこと久しい。疑惑と攻究と、またいつも付きまとう遅滞とを経て、やっとここに落ちついた考へ方である。自分だけでは、少なくとも今のところ、これを真諦と信じている。

フレーベルの精神を忘れて、その方法の末のみを伝統化した幼稚園を疑う。定型と機械化とによつた。幼児のいきいきしさを奪う幼稚園を慨く。幼児を無理に自分の方へ捕えて、幼児方へ赴き即こうとするこまやかさのない幼稚園を忌む。つまりは、幼児を教育すると称して、幼児を先ず生活させることをしない幼稚園に反対する。——しかもこれ皆、他に対していう言葉ではない。そ

こで私は思い切つて従来の幼稚園型を破つてみた。古い殻を破つたら、その中からみつけれられたものが、この真諦である。

この小さい本は、幼稚園保育の全体美を取り扱っているものではない。……幼稚園というものを、その真の面目において生かすべき実的な契を捕えたいとしている。この意味において、保育法の平な概説ではなく、寧ろつきつめた主張の書である。先ず丹念に、私の言おうとしているところを汲みとつて頂きたい。理論的の組み立てや、基礎づけではなくして、どこまでも実際を實際に即して、諸君と共にみつめたいと希つていたのであるから。

初版後年を経ること約三十年、久しい絶版の後、ここに復刊を試みるのは、わたしの考えが、尚この枠の中を往來しているからである。尚また、その実現を見ることの少ないのを慨くからである。微衷を記して、復刊の序とする。

昭和二十八年三月

著者

幼稚園真諦をめぐる

八坂富子

このごろの保育の中で

倉橋惣三選集第一巻の初版が出てから十年の月日が流れました。その間私が在職しました広島大学の付属幼稚園に、福岡の村大学の研究室に、あさひ幼稚園に、そしてまた東京の若葉保育園、東福保育園、草花幼稚園の書棚に四巻までの四冊がおさめられています。

そして私の保育の實踐が幼稚園真諦に支えられていることはもちろんのこと、共に保育に携った大勢の若い先生方やお母さんたちを通して、またこれから現場へ巣立っていく学生を通して一生懸命保育の心を伝えて来ました。時には手足や体を動かして拙い實踐も試みました。一言でいうならば子どもの生活を大切にすることということでしょうか。生活で生活を生活へ、ことはの通りです。先生がよく言われる「園丁」の役を果たすべく、このごろは草花丘陵の一角で梅のほころびはじめた園庭を、右往左往するのが日課の一つになりました。

幼稚園真諦の歴史的考察

私と幼稚園真諦との出会いは、朝海幼稚園で新卒三年目を迎えた夏の講習会場で求めた「幼稚園保育法真諦」の初版です。先生の著書は単行本でその都度求めましたので、幼稚園真諦も昭和九年の初版に長年親しんで来ました。これには第四編に誘導保育案の試みとして、当時付属幼稚園で行った実践例が五題百十ページのスペースをとって報告されています。当時は、教員の養成が講義と実習と並行して行われていましたので、本校で講義をきいて帰ると付属で誘導保育が展開されていて、配属学級の作業や遊びに参加したり実習したりという具合で、この第四編には殊更愛着を感じるものです。実践例の序文に次のように記されています。

「教育は考えてばかりいては解けぬところがある。いわんや論じ合つてばかりいては益々むづかしくなるばかりである。試みて見るに限る。そこには案外に多くの可能も見出される。おのづからなる会得にも到るといふものである。試みるには少しばかりの勇氣がいる。しかしそれが故にこそ其の楽しさも亦伴うというものである」戦後カリキュラム論がはなやかであったころ單元という言葉が耳新しかったり、また現行の教育要領の中で望ましい経験や活動を選択配列し、とか生活経験に即し総合的な指導を行

う、などの考え方が既に四十年前の誘導保育案の中に流れていたと思うのです。

更にさかのぼると、その前年昭和八年の夏、日本幼稚園協会主催の夏期講習で六日十二時間連続で「幼稚園保育の真諦並びに保育案、保育過程の実際」と題して倉橋先生の講義を受けました。この講義の内容が翌年「幼稚園保育法真諦」として出版されたということが序文に記されています。この時に質疑応答の時間が充分に持たれて現場の多くの先生方から切実な問題が提起されました。その速記録が講義の内容も含めて幼児の教育三十三巻八、九号に記されています。この原稿を書くに当たって何年振りかで読みかえし、いつの時代も変わらぬ現場の悩みと、それに対する明快な解答に感激を新たにしました。

更にさかのぼると昭和六年から七年にかけて、お茶の水のバラック校舎で学んだ先生の保育の講義です。保育法真諦はその序文にも、

「この本は幼稚園保育の全体系を扱っているものではない。その方法に関してだけ語っているに止まり……」と書いておられる通り、あの底には先生独自の保育原理や原則が流れていると思うのです。それが当時のノートをくって見ると出て来ます。

保育法の原理 一、自発の原理 二、具体の原理 三、活動の

原理 四、社会的原理

その原理に基づいた原則が

保育法の原則 一、間接教育の原則 二、相互教育の原則

三、機会教育の原則 四、充足の原則 五、生活誘発の原則。

ここから発想したものが幼稚園真諦であり、誘導保育案である
と考えるのです。
(草花幼稚園)

江波 諄 子

倉橋惣三先生の解くところを語るのには、私にとって時期尚早なことです。少し前から、選集の編者で、わが短大の学長でもいらっしゃる坂元彦太郎先生より、直接に細かい微妙な解説をきき始めて、只今はますますこの本は、長く時間をかけて、自己の成長とともに熟読するに値すると感じ始めております。また十年前に、津守真先生がつくられた倉橋惣三の誘導保育論という小冊も、まだ手離さず日々読み味わっておる次第です。不運なことに、直接倉橋先生を存じ上げませんが、当時、倉橋先生と深くかわり、倉橋先生を十分理解されていらっしゃる諸先生方を通してこの選集を伝えられるということは、幸いなことだとも思っております。いわば、私は孫の代ともなるのでしょうか。私の焦りは、私の次の世代にいかにか倉橋惣三論を伝えることができるかに

あるとも思っております。

倉橋惣三選集を、この十年バラバラとページをめくり、幼稚園真諦を読み始めて感じ始めたいくつかのことがあります。その中で、一番大きく感ずることは、このように保育というものを生き生きと、ダイナミックに、難かしいことをも例えて柔らかく論じた本は、数が少ないのではないかとことです。もちろんこれが講演をもととしていることもそうなる原因のひとつでしょう。

しかし、とかく学問を通して幼児の保育を考え始めると、どうしても頭の中に入って十分に消化しきれないいくつかの理論にとらわれがちになりますし、また、体験の中から幼児をとらえると、細かい保育技術は実にはすばらしいのだけれど、統合的にまとめて他に語るまでには力が及ばないのがふつうだと思っております。これら二つの悩みを結びつけ、十分に納得のゆくように語っているのが幼稚園真諦であると思えます。

この中には、倉橋先生と、当時現場を担当しておられたお茶の水女子大学付属幼稚園の先生方との火花を散らす焦点が書かれてあると、坂元彦太郎先生がいわれました。まことに、そこには子どものみならず、若き現場の先生方の生々しい姿と、それを十分に受けとめ、感じ入る目があつてこそ生まれたのだらうと察することができるので。ひとりの小さな人間が、ただひたすらに力

強い生命のエネルギーをもとに育つ姿と、それをみまもる大人の賢く慈愛深い育てる心が深く感ぜられます。幼児の保育に限らず、人間が育つ、または育てられる過程では、こうした真剣な両者の交錯はいつでも行われるものだと確信するのです。

幼稚園真諦の中では、いくつかの特別の語彙が意味深いものとして私共の注意を引きますが、私は倉橋先生が「自由遊びから仕事へ」の中で述べていらっしゃる「自由感」と「精進感」という語に目を止めさせられました。その他、自己充実、誘導など注意深い理解を必要とする魅力的な言葉がたくさん現われてきます。これらはいずれも私にとつて、保育のみならず、奥深い人生観としてとらえられるのです。

幼稚園という場も、誕生して以来百年もたちますと、次第にその名のみにとらわれ、形ばかりあまりに大きくなりすぎ、子どもを育てる本質がとらえにくくなります。私自身は現代の社会全体をも含めて、あまりにも慣習化し、加速している技工的生活から一歩でも抜け出られる余裕を持ちたいと願っております。この中で、幼稚園という場を、もう一度できた当初の精神にもどし、また幼い子どもの成長してゆく生活の本質をみつめ直す意味でも、この幼稚園真諦を読んでもらうことの意味深さをひしひしと感ずっております。

(十文字学園短大)